

下がり眉 ● 花美月

けふのごとあすあればよしが口癖の父の血管詰まらせる星
 土曜ゆゑ起こすのやめておくかとふ配慮のあらず脳梗塞は
 父にまだ残されてゐる力はも うつすらと目を開きたること
 手を強く握れど指の隙間より父のたましひ零れ落ちゆく
 息の緒に次の緒のなし 蓼科の遠嶺のごとき父の死に顔
 生きたとは残さること ぬぼたまの黒のヒールに足を振ぢ込む
 なみだつぶなむあみだぶつなみだつぶ殺到すなり白き手中に
 炬扉の前に立つればわたくしの身の暗がり風を音する
 ペルセウス流星の夜 耳たぶのほくろの位置はわたくしが継ぐ
 齒科九時と暦にあれば四日後の父の予約のキャンセルをする
 雨に寝て雨に目覚めて父のみぬ世界にぼんやり一月を住む
 死ぬるまで自分で飛んでしじみ蝶おのが命を水に葬る
 当たり前が当たり前ではあらぬなり 飛行機雲がふやけてゆきぬ
 重きドア押して書齋に入りたり椅子がこちらを向いてをりたり
 二月の主の不在に天金の金を曇らす愛読の書は
 苔の花慈しみぬし老眼鏡 父とふ文字に下がり眉ある
 風船を欲る駄々の手にコスモスをそつと握らせし父でありけり
 万なる苔つまみけるピンセット鈍く光るを形見としたり
 鈴虫のものはや孵らぬ十月の父の触れにし黒土を捨つ
 薄紙のやうな月浮く 明日をなほ生きるつもり髪を洗ひぬ